

IATDMCT2024 及びトロント大学でのミーティングに参加して

薬学部 6年次生
植村健矢

1. はじめに

私は、2024年9月15日から9月18日まで、カナダ・バンフで開催された、22nd International congress of Therapeutic Drug Monitoring & Clinical Toxicology (IATDMCT2024) に参加し、自身の研究成果を発表しました。また、9月19日に、カナダ・トロントにて、共同研究先であるトロント大学薬学部でミーティングを行いましたので、ここに報告致します。

2. IATDMCT について

International congress of Therapeutic Drug Monitoring & Clinical Toxicology (IATDMCT) は、薬物治療モニタリングと臨床毒性学の関連分野を世界的に発信する国際学会です。22回目の年会は、カナダのバンフにて開催されました。

私は、主に Symposium、Poster session 等で最新の研究に触れ、Welcome Reception、Congress Dinner、Young Scientist Gathering 等で海外の方々と交流を行いました。



図 1. 会場にて 左から西本君、著者、大野君

3. ポスター発表について

私は、Sorafenib activates inflammasomes leading to sorafenib-induced immune related adverse events という演題でポスター発表を行いました。この演題は、チロシンキナーゼ阻害薬によって引き起こされる免疫関連有害事象の発症機序の解明をテーマにしたものになります。

初めての英語でのプレゼンテーションということもあり、しっかり準備をしていきました。そのお陰もあってか、程よい緊張感でポスター発表の時間を迎えることができました。そして開始早々、多くの方に来ていただき、沢山の質問を頂きました。中には想定していないような鋭い質問もありました。しかし全体を通

して、準備した資料等も用いながら、自分なりの言葉で伝えることに必死だったため、ポスター発表の1時間はすごく楽しくてあっという間でした。

そして研究面においては、改めて基礎のデータだけでなく、臨床を意識して基礎と臨床の関連性があるかを確認しながら、研究を進めていくことが大事だと感じました。実験データが臨床とどのように関連して、どの程度一致するものなのかと試行錯誤しながら、今後も研究を進めていきたいと思います。

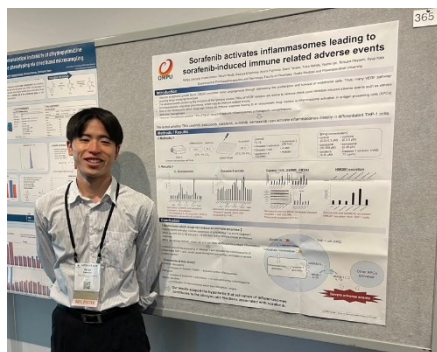


図 2. ポスター発表会場にて

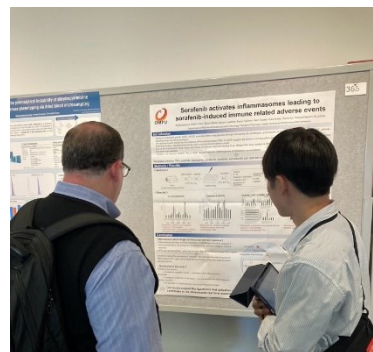


図 3. ポスター前での質問対応

4. 海外の方々との交流

学会主催の Welcome Reception、Congress Dinner、Young Scientist Gathering 等のディナーを通して、海外の方々と交流する機会はとても多かったです。私は特に留学などの国際交流はほとんど経験なく、海外の方と対面でしっかりお話することは初めてでした。そのため、最初は何をどう話せばよいかわからず、ただご飯を食べているだけでした。しかし、こんな絶好の機会を逃してはいけないと自分を奮い立たせ、失敗を恐れずとにかく積極的に話しかけていきました。とにかく思いついたことを1語ずつ単語で話しかけており、伝わらないこともありましたが、そのトライ&エラーを繰り返しているうちに、相手の話していることが何となくわかるようになり、しっかり海外の方とコミュニケーションができるようになったため、とても楽しかったです。



図 4. Welcome Reception



図 5. Congress Dinner

また、学会以外では、現地のドラッグストアで働く薬剤師の方とも交流しました。友人の喉の調子が悪かったので、ドラッグストアで薬剤師の方に相談しました。その方は、倦怠感や熱の有無など、しっかり症状を聞き取ったうえで最適な薬を薦めてくれました。その際に、日本の薬学生だと伝えると、薬の内容もしっかり説明していただき、とても分かりやすかったです。陳列されていた商品自体は、日本とあまり大きな差はなく、日本でもよく見る薬が多かったです。

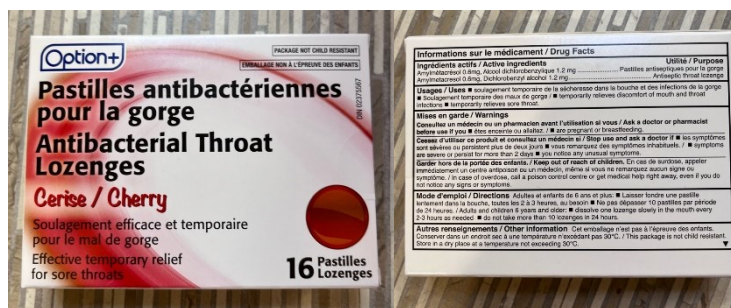


図 6, 7. お薦めしていただいた薬



図 8. 現地の薬剤師の方と

5. 開催地バンフについて

開催地のバンフは、カナダのアルバータ州に属している町です。バンフ国立公園内に存在しており、カナディアン・ロッキー山脈観光の中心地です。夏季の登山、冬季のスキーなどで賑わうリゾート地であり、温泉保養地としても人気が高い場所になります。9月はちょうど季節の変わり目で、気候が安定しない時期ですが、私が訪れたその4日間だけ快晴でした。そのため、バンフのダウンタウンや自然がとても綺麗に見ることができました。また夜には、オーロラを見ることもできました。現地の方も中々見ることがないみたいで、とても綺麗でした。

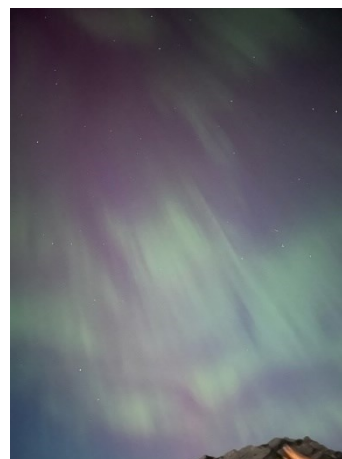


図 9. オーロラの様子

6. トロント大学薬学部でのミーティング

私は、学会終了後、カナダ・トロントにて、トロント大学薬学部の Jack Utrecht 教授らとミーティングを行いました。ミーティング内容は、主に特異的な薬物副作用のメカニズムの解明についてです。私は、ミーティングを聞いているだけではありましたが、先生たちのプレゼンテーションや、熱いディスカッションを見学することが出来ました。これを目の当たりにして私は、世界をリードする研究者たちが、この機序を解明してより医療に貢献していきたいという熱い思いのもと研究を続けてきたお陰で、私も大学で最高の研究が出来たんだと再認識させら

れました。ミーティング後はラボ見学もさせていただきました。Jack 教授や現地の大学院生の方々は、とてもフレンドリーでお話ししやすかったです。

その日の夜は、Jack 教授の家に招待していただきました。私は、海外の方の家に入るのは初めてで、土足のままで入ってよいことや、レストランのコース料理のようなおもてなしなど、日本と全く異なる文化が、とても新鮮でした。

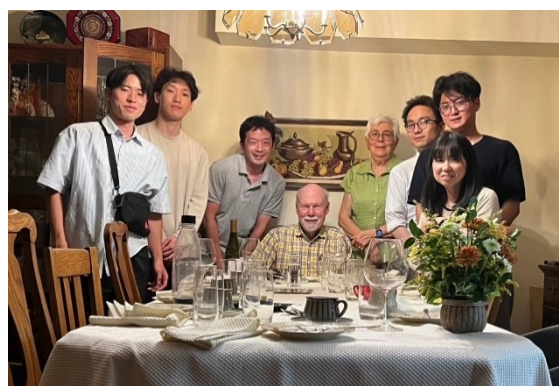


図 10. トロント大学薬学部 図 11. ラボ内の様子

図 12. Jack 教授宅での集合写真

7. 最後に

今まで英語の勉強は、明確な目標もなく何となく出来たほうが良い、出来たほうがカッコいいからという理由でやってきました。しかしこの経験を通して、海外の方ともっとお話しして、相手の価値観や文化をもっと知りたいと感じました。研究面においては最先端の知見に触れることができ、自分の研究に活かしていきたいと思いました。これら明確な目標のためには、英語は必要不可欠なツールになると学びました。他にも沢山のことを学ぶことができ、このような貴重な経験は、この先一生忘れられない思い出です。これらの経験は、加藤先生をはじめ、薬物治療学I研究室の皆様のおかげです。本当にありがとうございました。